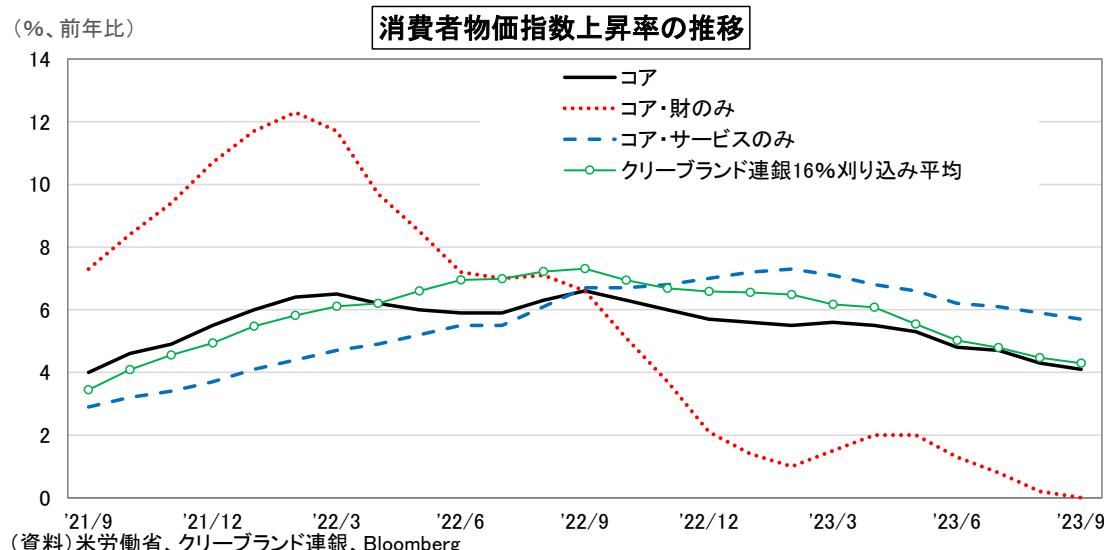
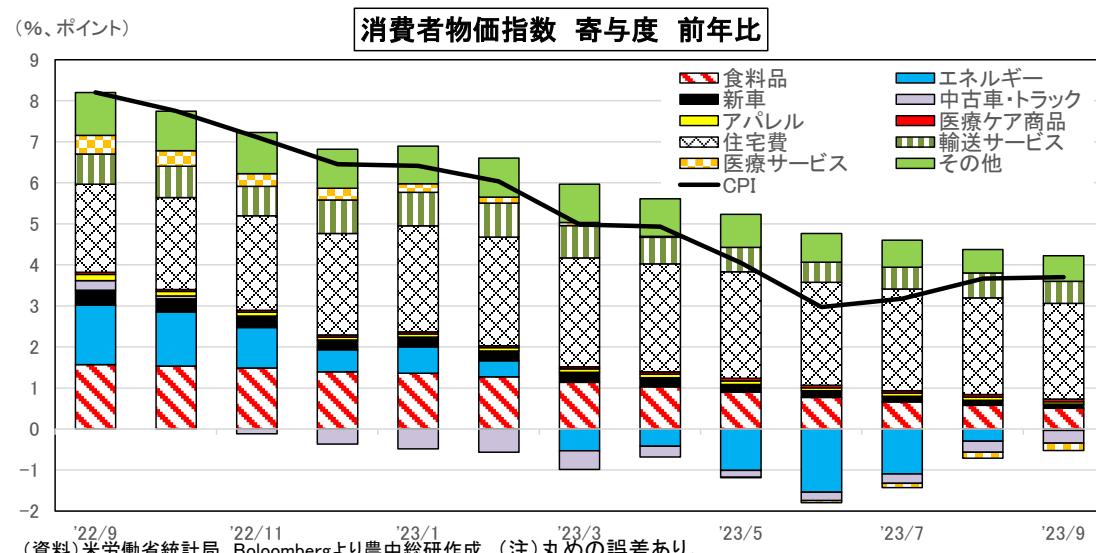


### (米国) 下げ渋りが続く消費者物価指数

9月の消費者物価指数(CPI)を確認すると、総合は前年比3.7%（前月比は0.4%）、食料とエネルギーを除くコアは同4.1%（同0.3%）となった。前月比でみたコアCPIなどは5～6月から続いていた鈍化傾向が小休止となり、小幅ながらインフレ率は再加速している。なお、住宅費の伸びは前月比0.6%と23年5月以来の高い伸びとなった（前年比は7.2%）。また、前年比でみると全体としては緩やかな鈍化傾向が確認できるが、依然としてインフレ率が高いことには変わりないだろう。



前年比で計ったCPI総合に対する寄与度では、依然として住宅費が占める割合が大きい。一方で食料品やエネルギーによるCPIの押し上げ幅は小幅にとどまっていることがうかがえる。



金融政策との関係では、9月CPIは金融引き締めを継続する必要性を示唆していると考えられる。FRBが(PCEデフレーターで計った)2%物価目標を達成するためには、コアCPIの前月比が0.2%程度で推移する必要があり、8、9月CPIのように上振れすると、物価目標達成時期は後ずれすることとなる。とはいえ、早急に追加利上げを行う必要に迫られているとまでは考えられないため、次回のFOMC(10月31日～11月1日)では利上げを見送る可能性が現時点では高そうだ。全体としては、現在の金利水準(5.25～5.50%)が十分に引き締め的かどうかを判断するには、9月CPIでは材料不足といえるだろう。